

2018・11・8

10月25日、プロ野球ドラフト会議の日。巨人から1位指名された八戸学院大・高橋優貴投手の記者会見場には多数の報道陣が詰めかけた。少し高揚した様子の記者らと高橋投手のやりとりを、やや離れた場所から同大硬式野球部の正村公弘監督が静かに見つめていた。

高橋投手を4年間、手塩にかけ育ててきた監督を、これまで何度か取材した。「馬力があり、強い球を投げる。ただ弱いところもある」。高橋投手のことをそう話すのを耳にしたこともあった。

会見中、正村監督に近づき感想を聞いた。「1位とほね」とにやり。どこが評価された? の問いには、少

東奥春秋

師の心、選手の心

し考えて口を開いた。「大人になつたよ。随分成長し、人としての基本ができた。それが技術につながった」会見で「大学4年間で学んだことは」と聞かれた高橋投手は「投手としてしろさがあったが、人間的に成長できた」と答えた。師弟の思ひはびたり、重なっていた。

勝負の世界で戦う相手の上に行くには厳しい鍛錬が不可欠。パワハラ問題がまぶしい昨今のスポーツ界だが、正村監督と高橋投手の話は、指導者との良好な関係が選手をより強くすることを印象づけた。師がいて、ライバルがいて、アスリートは成立する。だからスポーツはドラマになる。

(8)